

『蘭語訳撰』 文化7 (1810) 年

本書を編纂した**奥平昌高** (1781–1855) は、この時期の蘭癖大名の最たる人物に数えることができる。彼はシーボルトと交流を持つなど、蘭学の普及に尽力していた薩摩藩主**島津重豪**の次男として生れ、豊前中津藩主奥平家の五代養嗣子となった人物である。彼は、はやくから国学を修め、和歌なども嗜んだようである。同時に、実父重豪や、義祖父であり同じく『解体新書』 (1774 年) が作られる過程で、前野良沢や杉田玄白ら蘭学者を力強く支援していた三代**奥平昌鹿**からの影響を受け、オランダ語をよく理解し、日常生活にも同国の様式を取り入れていたともいわれる。こうしたことから、昌高はこの時期に本格的な日蘭対訳辞書の必要性を痛感していたものと思われる。実際の編集については、長崎生れの阿蘭陀通詞であった馬場佐十郎や家臣の神谷源内弘孝などに昌高が命じて作らせたもので、馬場が選んだ約7千余語をいろは順に並べ、さらに天文、地理、時令、数量等など19の部門に分けて収録している。本書は江戸で刊行されたものであるが、昌高が編纂したことから、別名『中津辞書』とも呼ばれ、彼がここに示した思想は、続編として作られたとされる『バスタールド辞書』へと繋がっていく。